

## 「記号」と「象徴」

荒 木 正 見

今日、「象徴 (Symbol)」は極めて多義的に用いられている術語のひとつである<sup>(1)</sup>。小論は、その多義性の混乱に対して、論理的展開をもって統一的に整理された見通しをつけようとする試みのひとつである。

### 1

他の諸々の「記号 (Sign)」同様、「象徴」も「記号」である。「記号」も「象徴」に劣らず多義的に用いられる術語であるが、今日多くの記号論者がその根底に於て一致しているのは、「XはYを代理表象する (stand for)」という二項の関係のうち、Xを「記号」と呼びYを「意味」と呼ぶという点である<sup>(2)</sup>。

この関係は〈symbol〉のギリシア語〈σύμβολον〉が、例えば「饗宴 (Συμπόσιον) 191C.で述べられる「ひらめのように一つのを二つに断ちきられた……人間の割符 (σύμβολον)」と述べられるように、更にはパースが〈σύμβολον〉に言及して<sup>(3)</sup>、それは「規約的な (conventional)」性格を持つとして限定的な対応を強調する<sup>(4)</sup>点に見られることができよう。また、カッシーラーは、認識の模写説 (Abbildtheorie) 的傾向をシンボル論によって超えようとするが<sup>(5)</sup>、そこでヘルツ (Heinrich Hertz) に言及する際「科学が過去のものから未来のものを導き出すのに必要な手続きは、われわれが外的な対象についての『内的な虚像ないしシンボル (innere Scheinbilder oder Symbole)』を作り出すことである<sup>(6)</sup>」と述べている。この「内的」と「外的」の間に成立するのはやはり上記の代理表象関係である。更にランガーは「代理のサイン (substitute sign)」即ち「我々が過去に知覚した事柄や、

単に記憶の組合わせによって想像し得る事柄でさえ、また過去或いは未来の経験に於て存在し得るかもしれない事柄までも現在の経験に於て代理している<sup>(7)</sup>」記号が「シンボル」であると述べる。

しかし、例えばフッセルが「記号」の分析<sup>(8)</sup>のはじめに、「代理表象」的な限定関係が最も強いと見られる「指標 (Anzeichen)」を置きながら、やがて、表面的には限定関係が明瞭ではないが客観的イデア的なものが「代理表象」されているが故により本質的な機能であるとされる「表現 (Ausdruck)」へと還元を遂行していくように、〈X stands for Y〉というのは決して単純な関係ではない。筆者は、フッセルの叙述の当の箇所について既に細かくトレースしたことがあるので<sup>(9)</sup>、詳述は避けるが、問題の在りかを明確にする為に、そこでは述べなかった「指標」と「表現」に於ける「代理表象」関係の図式的差異についてここで触れておきたい。

「誰かがその存立について顕在的な (aktuell) 知識を持つ何らかの諸対象ないし諸事態は彼に、何らかの他の諸対象ないし諸事態の存立を、次のような意味に於て、即ち、一方の存在の確信が他方の存在の確信ないしは臆測の動機として（しかも非洞察的な動機として）彼に体験されるという意味に於て、指示する (anzeigen)<sup>(10)</sup>」と述べられる「指標 (Anzeichen)」は、XとYとが、イデア的領野をも含む潜在的な領野を切り捨てて、顕在的な意識の領野でのみ限定的に結びついている記号機能であるといえる。ここではただ単にXとYおよび両者の関係のみが平面的な地平の上で問題になるのみである。即ち、「指標」は「記号」の一般的規定たる「代理表象」性を単純に表わしただけのXとYの二項の関係である。

これに対して幾つかの様態に於て考察される「表現 (Ausdruck)」は、潜在的な領野をその機能に保持しているところに、「指標」とは決定的差異を持つ。「表現」に於て問題になるべき記号機能に関わる各項の区別は、まず「名辞 (Name)」の例を挙げて次のように述べられる<sup>(11)</sup>。即ち、「名辞」が「〈告知する (kundgeben)〉もの」と、「名辞」が「意味するもの」(意味、名辞的表象の〈内容〉)、そして、「名辞」がそう名づけている「当のもの」(表象の対象)、との区別である。「〈告知する〉もの」とはこの場合、先の二極構造に於けるX (記号そのもの) と並行的に考えられる。「伝達機能に於ける諸表現 (Die Ausdrücke in kommunikativer Funktion)」の場合、告知の理解とは、「告知についての概念的な知でもなければ、言表 (Aussage)

の種類についての判断でもなく、聞き手が話し手を〈直観的に〉、然々のことを表現する人格として把握する（統覚する）こと、端的に言えば、そのような人格として〈知覚する〉ことにすぎない<sup>(12)</sup>。」と述べられるように、「〈告知する〉ものそのもの」についての理解なのである。

フッセルによれば上の三極的区別は単に「名辞」や「伝達機能」にのみ成立するのではなく、「表現そのもの」「その表現の意味」「表現に属する対象<sup>(13)</sup>」という区別として、すべての「表現」に成立するとされる。

さて、ここに示される三極構造は、先の二極構造に比べてY（意味）が分岐していると言えようが、「記号」に於て潜在性を認めることと、「意味」が分岐することとはどのように結びつくであろうか。それを「意味」から考察してみよう。

ハイデggerは「了解 (Verstehen) されるに至っている、ということをお我々は、意味 (Sinn) を持つ、と呼ぶ<sup>(14)</sup>」と述べながらすぐに「しかし厳密に理解されれば、了解されているのは意味ではなく、有るもの (Seiende)、乃至は有 (Sein) である<sup>(15)</sup>」と述べる。ここで前提的に考えられていることは「指向性 (Intentionalität)」である。メルロ＝ポンティが端的に述べるように<sup>(16)</sup>、フッセルは「我々の判断や、意志決定の指向性」であるところの「作用指向性 (l'intentionnalité d'acte)」と、「世界と我々の生活の自然のおよび前述定的 (antéprédicative) 統一をつくっているもの、客観的認識におけるよりもむしろ、我々の欲望や評価作用や我々の風景において一層明瞭に現われるもの、そして、我々の認識がその正確な翻訳であろうと努めているテキストを提供してくれるもの」であるところの「作動的指向性 (l'intentionnalité opérante, fungierende Intentionalität)」とを考えていたといえる。フッセル現象学の「発生的現象学」と呼ばれる側面を基礎づける後者の「指向性」は、本来我々が表象しているにすぎないと思われている知が、懐疑論的な限界を持つものではなく、むしろ我々は対象そのものに、否、対象という言い方さえ成立しない有に出会っているということを導く。

ハイデggerは「指向性」を念頭に置いて「意味」について次のように述べる。「意味は、先持 (Vorhabe) と先見 (Vorsicht) と先把握 (Vorgriff) とによって構造が作られている企投 (Entwurf) の〈どこに向かって (Wor-raufhin)〉ということであり、そこから、或るものが或るものとして理解可能になる<sup>(17)</sup>。」このように「意味」は潜在的な「先 (vor) = 構造」によって

指向性を保持するとされ、それは言わば外枠的な姿であるとしても、「有るもの」が立ち現われていることを意味する。

さて「意味」はこのように「了解」という事実に沿って説明されるが、ハイデッガーは「解釈 (Auslegung)」という厳密な意味で「有」を把握する我々の意識的態度に、「了解を完成することを、我々は解釈と名づける<sup>(18)</sup>。」また、「解釈は了解に於て企投された諸可能性を成就することである<sup>(19)</sup>。」と述べるように、「了解」の構造を組み入れる。その時、「了解」には「意味」という術語が成立する場所が生じる。「了解」に於て「有」は常に立ち現われているにしても、また、「一切の解釈は上のように特色づけられた先 (vor)=構造のうちに動いている<sup>(20)</sup>」のであるから「了解をもたらすべき一切の解釈は、解釈されるべきものをすでに了解していなければならない<sup>(21)</sup>。」とされるように、「了解」は立ち現われる「有」から逃れることはないにしても、それは厳密な意味で述べられる「解釈」に向けての充実可能性でしかない。とすれば、「了解」するということは即ち「有」の潜在性を顕在性へともたらすことであり、その都度「了解」されるのは「意味」である<sup>(22)</sup>。この「意味」は、図式的にはフッセルの三極構造に於ける「その表現の意味」に対応し、「有るものもしくは有」は「表現に属する対象」に対応することになる。

ところで、上のように示されたフッセルの三極構造の各辺はそれぞれ「代理表象関係」を保っていると言える。まず「表現そのもの」と「その表現の意味」については言う迄も無い。また、「表現そのもの」と「表現に属する対象」は、本来目指している「代理表象関係」である。更に、「その表現の意味」と「表現に属する対象」は前者が後者を表象に於て代理しているのである。

このように、「記号」の主な性質である「代理表象」関係は、一般的な「記号」に於ては上の三極構造として示される。単なる二極構造として成立しないのは、いかなる「記号」も我々にとって、現象している「事柄」である、という上記の基本性質によるものであった。

さて、我々はいま「代理表象」関係に着目しているが、この関係は「記号機能」が完全に働いている状況を現われているがままに記述しようとする時、ひとつのパラドックスを引き起す特殊な関係である。例えばフッセルが言語表象の例を挙げ、「我々が言語表象を体験している間は、我々は決

して言語を表象するのに専念しているのではなく、もっぱら、言語の意味(Sinn)或いは意義(Bedeutung)を成就することに専念しているのである<sup>(23)</sup>。」と述べるように、「記号」が「代理表象」という機能を完全に遂行している時には「記号」は表象から消滅しているのである。

このパラドックスは一種の「意味論的解決」によって解かれる。即ち、「記号そのもの」が完全に機能している状況に対して、反省的観点をもって捕え直せば、そこに「記号そのもの」と「記号の意味」とが「代理表象」関係をもって成立している状況が認められるのである。その場合、「記号そのもの」から「記号の意味」が決定されたのではなく、「記号の意味」から「記号そのもの」が決定されたのである。「記号」が完全に機能している状況に於て、その時現われている事柄（「記号の意味」と呼ばれるべきもの）は、「了解」に関して既述したように、様々の潜在的要素によって構成されていると言える。その潜在的要素の一部が「記号そのもの」として顕在化され、反省的立場から、先の事柄（「記号の意味」）と「代理表象」関係をもって結び合わされるのである。例えば文学作品を読む時、我々は「文字そのもの」を読んでいるわけではない。しかし、反面、文学的内容、感動、テーマといった「意味」がその最も顕在的な核を形成してはいるものの、「文字」の表象を全く切り捨ててしまっているわけではないであろう。「文字」の表象は視覚的には意識に現われている筈だからである。然るにそれはいわば「意味」という明るみの背後に、「意味」を構成しつつ影のように寄り添っているもののひとつである。ハイデッガーは「解釈に於て、従って一層根源的には会話に於て、既に存在する分節可能なもの<sup>(24)</sup>」を「意味」と名づけるが、まさに「意味」とは上に述べてきたように「分節可能なもの」なのである。

では、なぜ例えば「文字」が「記号そのもの」となるのか。この点に関して真に論理的な説明を求めるのは本質的に不可能なことである。我々はただ現実的な事態を説明することしかできない。ランゲルが、「一方の項(意味)が他方の項(記号)より興味を魅く、また、前者より後者の方が利用し易い<sup>(25)</sup>」と述べる「記号」と「意味」の交換不可能性も、単なる説明という意味ではあるものの、ひとつの有効な説明であろう。

## 2

我々は「記号」の一般的規定である「代理表象」関係に長くかかり過ぎたかもしれないが、実はその考察の中に既に、「記号」と「象徴」を区別する鍵が隠されている。その第一は「象徴」の「発生的 (genetic)」性格である。

無意識的パターンのイメージに於ける現われとして「象徴」を研究したユングは、まず「象徴 (Symbol)」を「当の表現が、比較的知られてはいないが、存在していると認められているか、もしくは存在するはずであるとされている事態の、最上のしるしな形式である<sup>(26)</sup>」と述べる。これに対して「何かある既知のものの類似物或いは略称」を「記号的(semiotisch)」と呼び<sup>(27)</sup>、また「ある既知のものを意図的に言い換えたもの、あるいは作り変えたもの」を「寓意的(allegorisch)」と呼ぶ<sup>(28)</sup>。ここで示される「記号的」と「寓意的」との区別は必ずしも明瞭な論理性を持っているとは言えないが、その両者と「象徴」との区別は明らかである。即ち「象徴」は比較的未知のものの代用であり、その他は既知のものの代用であるという点である。ユングは「神の愛」を「十字架」によって代用させるのは「記号的」だとする<sup>(29)</sup>。なぜなら、「神の愛」を「十字架」という多義的な対象によって代用させるより、〈神の愛〉という言葉で表現する方がより適切だからである。これに対して「十字架」が「象徴的」に用いられるならば、それは他の言葉では表現できない何らかの神秘的超越的な事態の最も適切な表現であるということになる。この、既知のものの代用という考え方は、「代理表象関係」の両項と関係とが限定的であるという点に於て、フッセルの「指標」と類似している考え方であり、また未知のものの代理という考え方は、「代理表象関係」の少くともY項と関係とが非限定的であるという点に於て、「表現」と類似した考え方であると言えよう。前者を積極的に推し進めれば「寓意的」な性格の強い「規約」へと至り、後者をたどれば「発生」へと至る。「発生」と「規約」については筆者は既に考察したので詳述は避けるが<sup>(30)</sup>、「規約的記号」は我々の意志によって限定を持つものに対して、「発生的記号」は、我々の意志では動かしようのない所に限定のありかを持つのであった。〈動かしようのないところ〉とは、ユングにおけるPsycheの構造では、「集合的(kollektiv)無意識」や「個人的(personlich)無意識」といった「無意識(Unbewußte)」であり<sup>(31)</sup>、フッセルの発生的現

象学に於ける発生の諸層（「主観 (Subjekt)」、「間主観 (Intersubjekt)」、「客観 (Objekt)」）であるような、「あらゆるものを結びつけ、そして、個々のあらゆるもののそれぞれを支配している動機づけ (Motivation) の形式<sup>(32)</sup>」が成立する場所である。「発生的記号」は、かくして前節に述べたような意味で「解釈」されねばならない。

我々は今や、「象徴」に「発生性」という性格を見極めるべきであろうが、それは例えば文学史上の「象徴主義 (Symbolism)」という術語使用に端的に現われている。チャドウィックによる入門書における簡潔な定義によれば、「象徴主義とは、感情を含めて詩人の内奥にひそむ思想であろうと、人間の求める超自然的な完璧の世界を形成するプラトンの意味でのアイデアであろうと、要するに現実をこえて、その背後にあるアイデアの世界にわけ入ろうとする試みであるということができる<sup>(33)</sup>」とされる「詩人の内奥にひそむ思想」「アイデア」といった事柄は、上記「無意識」や「発生の層」に位置するものの表現であることは言う迄もない。そして、「象徴」について我々に課せられるダイナミズムは未知に向かって分け入ることであるが、それはとりも直さず「解釈」であり、「指向性」に忠実に「解釈」することである。これは「象徴」が「発生的に」「動機づけ」られているからこそ可能であると言える<sup>(34)</sup>。

ところで、「象徴」と、「発生的記号」とは同義であろうか。この点については、例えばランガーが、ある事柄が1対1の行動を喚起する場合にその機能を「記号作用 (sign-function)」と呼び、そうでない場合の機能を「象徴作用 (symbol-function)」と呼ぶように<sup>(35)</sup>、「記号」と「象徴」との機能的区別をもって区別されなければならない。「記号」の場合は例え「発生的記号」であっても、ランガーの区別からもそう言えるように、「代理表象関係」を強い限定のもとで観ようとする点において、機能づけられていると考えられる。これに対して「象徴」の場合は、「代理表象関係」とともに、この節で考察した「発生性」、更に次節で考察する「体系性」をも併せた視座によって機能づけられていると言える。従って、仮に「記号」の類型化を行う際には、「象徴」には特殊な位置づけが要求されるであろう。

### 3

前節に於て我々は「発生」が或る構造に基づいているという手懸りを得

た。その構造的思考が、「象徴」の次なる性格、「体系的」性格を導く。紙数の関係で、その構造の具体的考察は別の機会に譲らねばならないので、ここでは「構造」と「体系」を考えるべき方向をのみ示唆しておきたい。

いま「赤い光」がある。我々はそれを「止まれ」の「意味」であると了解する。ただこれだけであれば、「記号」的機能である。しかし、それが例えば「象徴」的機能をもって映画の一場面に現われているとすれば、その「意味」は或る奥行きを持たされることになる。我々はその「赤い光」に対して、「交通信号」の「止まれ」であるのか、それとも更に「意味」があるのかと、「意味」の奥行きを目指そうとする。その場合、我々の思考が、単にその「赤い光」の「意味」乃至は「対象」を目指すという直線的な思考のみであることは不可能である。既述したように、目指すことが可能であるのは「指向性」によるものであり、「指向性」は言わば潜在的に構成されているものである。潜在的構成について、我々にできることはそれを「解釈」することである。その場合、例えば先の「赤い光」はいかなる様態の形式のもとに「解釈」されるのか、が問題になる。「赤い光」はストレートに〈映画表現における赤い信号〉と語られたとしても、すでに〈映画表現における〉という形式的地平の上で考えられている。実のところ、我々はそれを、現実的な記号使用の場合自動的に行っているのであるが、機能的区別としての「象徴」では、その点を考慮に入れて、常に或る奥行きと、体系的地平を認めつつ捕えていこうとするのである。これは、前節の諸例からも明らかである。

「発生」的性格から導かれたこの「体系的」性格について、カッシーラーは「言語」「芸術」「神話」といった「象徴」に触れ、「それらに共通のただひとつのことは、いずれの場合にも感覚的個別がそれぞれ独立しているのではなく、ひとつの意識の全体にはめ込まれ、そこから始めてそれぞれの質的な意味を得る、ということである<sup>(36)</sup>。」と述べ、そこで、言語形式、芸術形式、神話形式といった体系的諸形式を想定するのである。

ところで、「体系」については、〈体系の内部に於ける無矛盾〉という「完全性」が「象徴」の中で最も厳密な体系として構築されている Symbolic Logic では証明されている。この「完全性」は、他の一般的な「象徴」体系に於ては、どのように説明されれば良いのか、これは未開拓の分野である。このことはまた「完全性」と表裏を為す「不完全性」についても同様に言



える。これは今後の大きな課題となろう。

また、全体を通して問題になってきたのは、既述のように「発生の構造」乃至は「象徴の諸形式の構造」である。これは、筆者にとって当面の課題<sup>3</sup>である。 (1980. 1)

註

- (1) このことはシンボルに関する著作には必ず記されている。例えばシンボル辞典として一般的な J. E. Cirlot の “A Dictionary of Symbols” (Translated from the Spanish by Jack Sage) の序文に於てもシンボルの定義づけの冒頭 (p. 29) にそれが述べられ、その際とるべきは比較的方法であると主張される。
- (2) このことについては筆者は既に “「発生」と「規約」——記号類型化の根底”, “哲学論文集” 第十四輯 (九州大学哲学会編) に於て考察した。
- (3) “Collected Papers of Charles Sanders Peirce”, Vol. 2, Par. 297
- (4) 厳密には限定的な一面だけではないことを筆者は註(2)の小論で述べた。
- (5) このことは、筆者が小論で後述する「体系性」に関連する。
- (6) Ernst Cassirer: “Philosophie der Symbolischen Formen”, S. 5
- (7) Susanne K. Langer: “Philosophy in a New Key”, p. 31
- (8) Edmund Husserl: “Logische Untersuchungen”, Bd. 2, I. Teil, §1- §16
- (9) 註(2)の拙稿参照。
- (10) “Logische Untersuchungen”, Bd. 2, I. Teil, §2
- (11) *ibid.*, §6
- (12) *ibid.*, §7
- (13) *ibid.*, §11
- (14) Martin Heidegger: “Sein und Zeit”, S. 151
- (15) *ibid.*, S. 151
- (16) M. Merleau = Ponty: “Phénoménologie de la Perception”, Avant-propos XIII p.
- (17) “Sein und Zeit”, S. 151
- (18) *ibid.*, S. 148
- (19) *ibid.*, S. 148
- (20) *ibid.*, S. 152
- (21) *ibid.*, S. 152

- (22) この「意味」は、意識的に乃至は顕在的に切り取られた内容にのみ限定すれば、ハイデッガーの術語では「意義 (Bedeutung)」に当る。しかし、筆者は後述するように分節可能性をはらんだものとして「意味 (Sinn)」という術語で表現する。(cf. “Sein und Zeit”, § 34)
- (23) “Logische Untersuchungen”, Bd. 2, I. Teil, § 10
- (24) “Sein und Zeit”, S. 161
- (25) “Philosophy in a New Key”, p. 58
- (26) C. G. Jung: “Gesammelte Werke”, Bd. 6, S. 515
- (27) *ibid.*, Bd. 6, S. 515
- (28) *ibid.*, Bd. 6, S. 515
- (29) *ibid.*, Bd. 6, S. 515-S. 516
- (30) 註(2)の拙稿参照。
- (31) C. G. Jung: “Gesammelte Werke”, Bd. 8, S. 161 f.f. ことに S. 172
- (32) Edmund Husserl: “Cartesianische Meditationen”, § 37
- (33) Charles Chadwick: “Symbolism”, 邦訳 “象徴主義” 倉智恒夫訳, p. 7
- (34) 註(2)の拙稿参照。尚、筆者はいずれ「発生的現象学」について発表する用意がある。
- (35) “Philosophy in a New Key”, p. 57-p. 64
- (36) E. Cassirer: “Philosophie der Symbolischen Formen, S. 27